

豪奢な本社社屋

「ブルームバーグ新欧州本社屋」

設計＝フォスター＋パートナーズ

ブレグジット時代にシティに投資すること

マルコ・ビアージ

参照 | 本誌pp.3-17

ブルームバーグLPは、エコノミストや金融ディーラー向けにリアルタイムで情報配信を行う著名で影響力のある国際企業である。1981年に前ニューヨーク市長マイケル・ブルームバーグによって設立された。旧大陸において自社の存在感を強化し、将来的な開発計画を促進するため、同社は近年、ロンドンの金融街「シティ」の中心部に大西洋以東の拠点を新たに設置することを決めた。ブレグジット[*Britain+exit*]すなわちイギリスのEU離脱以後も、シティはヨーロッパ金融の中枢であり続けるはずだ。

新欧州本社屋は、同社の多くの拠点の中で、ブルームバーグがゼロからすべて構想し実現した最初の建物

だ。同社が設計者に選んだのはノーマン・フォスター卿という、イギリス人建築家の中で(リチャード・ロジャースと並び)最も多くの受賞歴を持つ建築家である。敷地に選ばれたのはイングランド銀行とセント・ポール大聖堂に近い土地で、地下には古代ローマ植民都市ロンディニウムの時代に遡るミトラ神殿の遺構が埋まっている。

実現された建物はイメージにおいても内容においても豊饒である。13,000m²のブロック全体を占めているが、現代建築と歴史建築が織りなす周囲の街並みも考慮している。ウォルブルック川からクイーン・ヴィクトリア・ストリートまでのエリアを斜めに通るアーケード街を組み入れ、かつてのワトリング・ストリートの軌跡(ケルト時代からあり、古代ローマに受け継がれたロンドンとウェールズをつなぐ道路)を復活させ、ブロックを2つの三角形ボリュームに分割しブリッジで連結した。さらに、建物の高さ、セットバックさせた最上階、屋根の輪郭を近隣建物の高さに揃えることで、この地区の記念碑的スカイラインの断絶を避けている。

この建築は高度に洗練された技術的解を組み合わせ



空からの全景

ている。石とブロンズで形づくられた莊厳で力強い形態的解によって、BREEAM(イギリス建築研究所建築性能評価制度)に基づき優秀点(98.5%)と世界で最もサステナブルなオフィスビルの評価を受けた。石材には対面する治安裁判所と似たダービーシャー産の砂岩が選ばれ、場と機能に適したスケールを保つよう交互に階を重ねるファサード・フレームの基軸が定められた。他方、ブリーズソレ



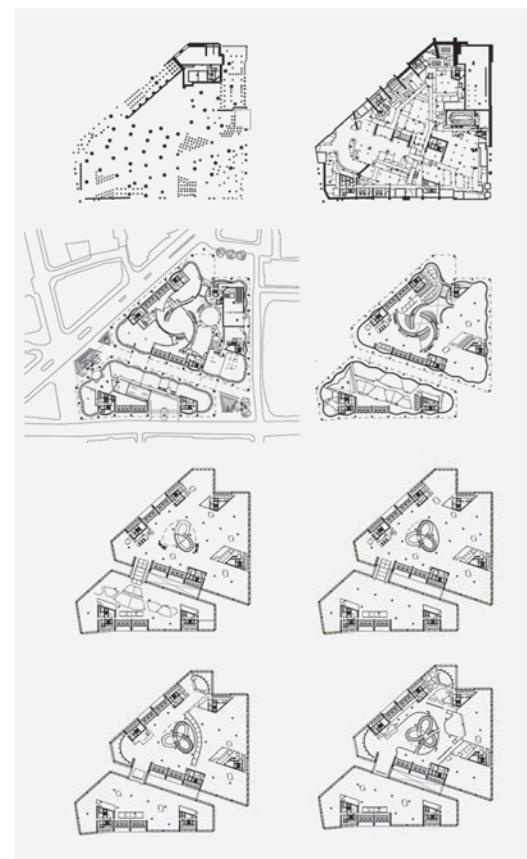
交差点より見る



クイーン・ヴィクトリア・ストリートより見る

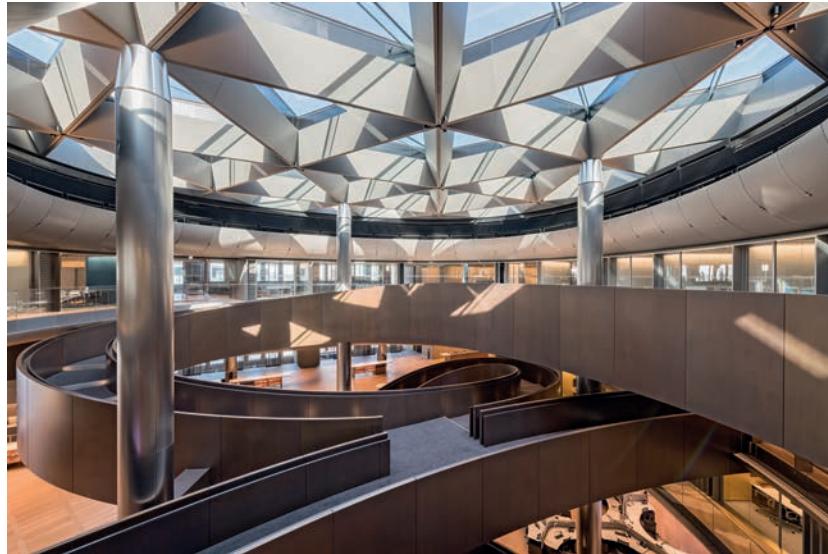


ブルームバーグ・アーケード



各階平面図

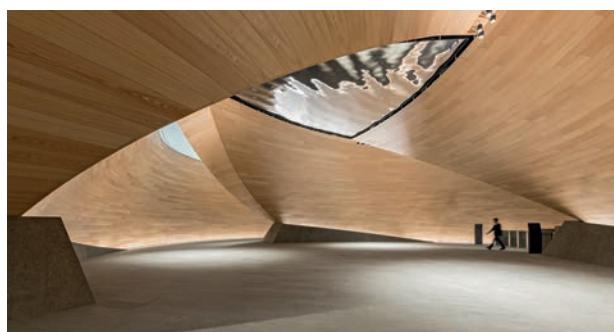
豪奢な本社社屋



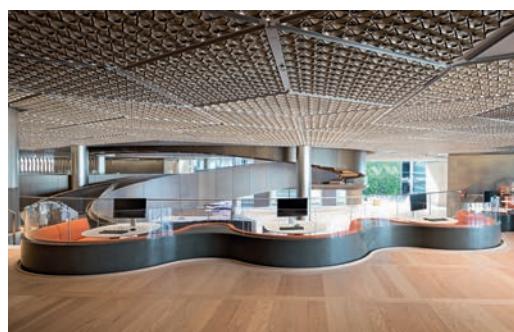
中央ヴォイドとトップライト



中央ヴォイド



ロビー：インスタレーション「Vortex」



ミーティング・ルーム



会議室

イユの大判で彫塑的な立体的フィンは、ブロンズ合金でできている。これがファサードの副次的構成を描き出し、壁面との連結部の背後にある自然換気用グレーチングを隠す。この換気口を動かす屋内微小気候の自動制御システムは、各階68個のセンサーによって温度、湿度、二酸化炭素濃度を常時測定している。

年間を通して、また特に夏季は、パッシブ換気が建物を水平方向に奥まで通り抜けて空気の再循環と労働環境のリフレッシュに貢献し、中央のヴォイドに集められる。このヴォイドは、屋根に適宜設けられた開口部によって煙突の性能を發揮する。117本のブロンズ製フィンの内側は防音材の被膜で覆われ、街路から伝わる物音を弱めて騒音問題を回避する。

このビルは地上10階建て(さらに地下2階)に伸び、毎日4,000人の従業員を迎える。1階の空間の50%は公共の用途にあてられた。例えば共有オーディトリウム、多

種多様な商業店舗、新しい地下鉄出入口、地下7mの元の場所にある古代ローマ遺跡への独立した出入口などがある。オフィスはオープンスペースに分散される。会議用の円形テーブルを中心とする6つのクラスターというかたちで、各階に700席が配置されている。高層ビルに典型的な、労働環境を水平に仕切る空間構成の影響は、サービス・コアを周縁に分配し、平面の中央部を楕円形の吹き抜けにすることでうまく回避された。この中央のヴォイドの中には、スタイルの階段が嵌められている。このスロープは湾曲した自立部材を、結合せずに連続的に組み合わせることによって、空間に特徴的な数学的円環を描く。それは、子供がスピログラフ[大きさの異なる歯車と鋸歯状の輪を噛み合わせ複雑な曲線を描くおもちゃ]で描くような、ハイポトロコイド(内転トロコイド)を思わせる。ヴォイドとスロープは1階に届く手前の2階で中断され、ロビーでは、「Vortex(渦)」と題された舞台装置のようなインスタレー

ションによって暗示されるにとどまる。このインスタレーションは3つの湾曲したボディーシェルを捩じり、アメリカ・セコイアの木材パネルで仕上げてできている。シェルの頂点には芸術家オラファー・エリソンの「No future is possible without a past」が置かれた。

平面における最奥部でも健康的な最適条件を確保するために基本的役割を果たすのが、特注のアルミニウム製「花弁型」天井である。電力消費の少ない50万個のLEDランプが組み込まれている。この天井は吸音機能を帯びるとともに、比較的高い温度の冷却水を用いて労働空間の暖房にも冷房にも役立てられている。ガラス張りのエレベーター・ケージがファサードの厚みの中の控え壁の間を上下するのが見える。エレベーターに乗った利用者は、広い休憩エリアが置かれた7階まで直通で行ける。中央のヴォイドの周囲に2層に分かれて配置され、格子のはまつ円形のトップライトから光を受ける。屋階も

「グリーン・ボックス、2010」

所在地:Cerido, Costiera dei Céch, Sondrio, Italy

参照:本誌pp.70-71

レティケ山脈の斜面に建つ週末住宅に付属する、使われなくなった小さなガレージのリノベーションである。亜鉛メッキ処理した軽い形鋼と鉄骨による構造体で既存のボリュームを覆い、おもに落葉性の蔓生植物の立体的支持体に改変した。小さな縁の隠れ家は、公園を眺める特別な展望台で、ガーデニング道具置場と会食できるエリアがある。素材は粗削りで簡素なままの姿だ。亜鉛メッキを施したスチールがキッチンと建具に、カラマツ材パネルが床と大きなスライディング・ドアに使われている。

設計:アクト_ロメジャッリ | 施工:Giuseppe Vanina

建具:Walter Pontiggia | ランドスケープ:Gheo Clavarino



外観



造り付けの建具



夜景



内部

「NPOマルティノ・サンシ、2013」

所在地:frazione Regoledo, Cosio Valtellino, Sondrio, Italy

参照:本誌pp.72-73

この社会教育センターはレゴレド集落の北端に位置する。そこは集落と、建物がなく今でも農業に使われている広大なエリアとが接する場所だ。このプロジェクトは当初、経済的な施工と、機能と規模の点で高い柔軟性が可能でありながら、多様な活動に向いた親しみやすく明るい空間も諦めずに済むような建築的要素の探求という意義を帯びた。最も単純で、さらに効果的でもあることが証明されたのが、基本的なトリリオン構造を起点に設計するというアイデアだった。アーキトレーブには、大量生産された鉄筋コンクリート製ブロックの使用が選ばれた。また、通常は工場の屋根に使われる部材を用いて、壁柱としての設計に基づきプレファブのパーティションが作られた。これらは荷重を支える支持体、ブリーズ=ソレイユ、ガラス壁を支えるフレームの3つの機能を果たす。パーティションにフォルムと表現上の高いクオリティを加えるため、アーティストで友人のヴェラスコ・ヴィターリとの協働が始まった。彼はその場限りの作品/木枠を作ることを了承してくれた。節約のため、規模の面でも構造の面でも同一に構想された3つのパビリオンには、教室、大工仕事場、多機能ホール、キッチンが置かれ、部分的に既存の小さな建物の目隠しとなっている。

設計:アクト_ロメジャッリ、Luca Volpatti

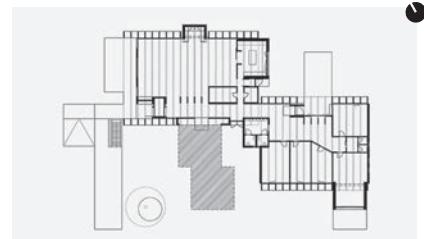
協働者:Daniele Vanotti

アート協力:Velasco Vitali

構造:Cristina Zecca | 設備:Studio Bertolini

施工:Gruppo Zecca

建具:Falegnameria Zugnoni



平面図



正面ファサード



センター内部



パーティション/柱

「ロッコロ・プール、2015」

所在地: Alta Brianza, Italy

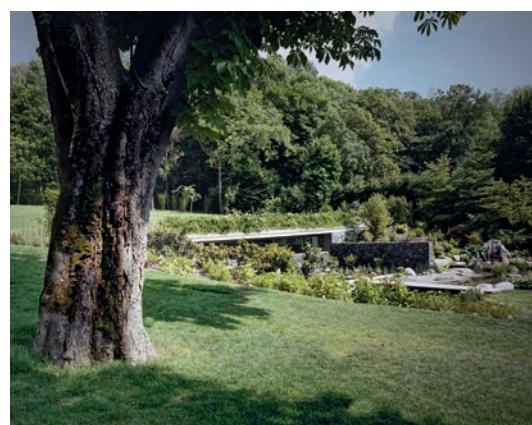
参照: 本誌 pp.78-81

このプロジェクトは、歴史あるヴィラの増築部として庭園と直結する別棟と、そこに周囲の公園の眺めをできるだけ妨げないような屋内プールを連結するという建築主の依頼から生まれた。建築家たちは新築の別棟/プールを、ヴィラから一定の距離をおいて、人口湖と連関する戦略的地点に配置することを選んだ。完全に新しく独立した場を創出し、1本の通路でアクセスさせることによって内密さを強調する。別棟は視界を妨げないために地下とする必要があった。また同時に、公園の自然の起伏を読み替えることによって、屋外の直接的な眺めを享受できるはずとした。新しい温室は全体がガラス張りとされ、ヴィラは公園とじかに接する。温室から階段と不規則な地下通路を通って、プールのある別棟に行ける。そこには他の関連設備も置かれ、換気と空調の総合的システムをできる限り目立たないかたちで建築設計に挿入する計画とされた。別棟の西側ファサードは、大きなスライド式窓枠の存在が全体を特徴づけている。この建具は構造の中空部に収納できるため、夏季は屋内と屋外が完全につながる。プールの水槽とその周りの床は単一素材で施工された。それが中間色のセラミック・モザイクで、柔らかく力動的なフォルムを使うことによってヴォリューム全体に連続性を与える。

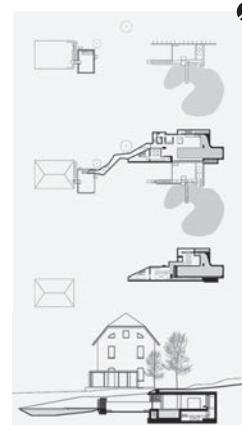
設計: アクト_ロメジャッリ | 鉄筋コンクリート構造: Maffia-Rossetti | 鉄骨構造: Moncecchi Associati

設備: Studio Bertolini | ランドスケープ: Emanuele Bortolotti | 施工: Seven Srl

建具: Thema | 特注デザイン家具: Fioroni | 照明: Mario Sulis | セラミック: Spandrio



温室より別棟/プールを見る



各階平面図/断面図



プール



プールより屋外を見る



プールへの通路

「プラーティの住宅、2017」

所在地: Prati del Bitto, frazione Regoledo, Cosio Valtellino, Sondrio, Italy

参照: 本誌 pp.82-85

この住宅は、小さな家が「点在する」宅地と「プラーティ・デル・ビット」と呼ばれた広大な緑地が特徴的な一帯の端に位置する。この草地は敷地の北側からアッダ川の土手まで広がっている。住宅地と農地の間という条件から、設計案はかたちづくられた。周囲には耕地の境界を画すための石壁が今でも残っており、自然と設計に刺激を与えた。ヴォリュームとファサードのデザインは完全に、その内部の居住空間のアイデア、フォルム、意味によって決定された。全体に抽象的なフォルムを課すのを避けることによって、住宅の多様な部分が小さな中庭を介して連関するひとつの私的世界を創出している。強風と周囲の建物から保護された中庭からは、両側が斜面になった山の頂が見える。住宅の屋内あるいは屋外の「部屋」は、三次元的な配置によって、複雑かつ刺激的な場を生む。じつにダイナミックな「私的世界」である。

乾式で積んだ石、打ち放しの鉄筋コンクリート、建具・仕上げ・作り付け家具に使われた檜材が、このプロジェクトを特徴づける素材である。

設計: アクト_ロメジャッリ

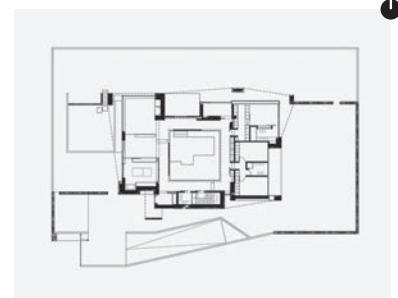
構造: Mara Sutti | 設備: Studio Bertolini

施工: EdilGi

建具・仕上げ: Falegnameria Ruffoni

特注デザイン家具: Fioroni

照明: Mario Sulis



平面図



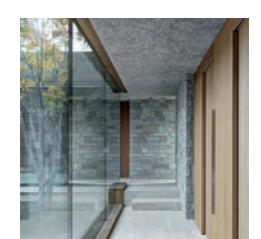
南より見る



車路より見る



エントランスへのアプローチ



中庭を巡る通路



通路より室内を見る

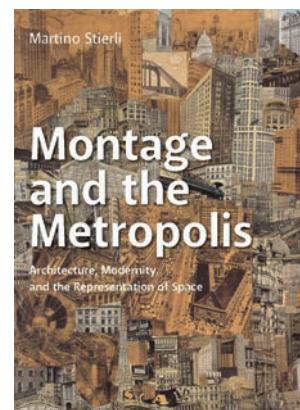
CASABELLA JAPAN リーディング

『モンタージュと「メトロポリス』——

建築、モダニティ、空間の表象』

マルティーノ・スティエリ著、イエール大学出版局、2018年

Martino Stierli, *Montage and the Metropolis. Architecture, Modernity, and the Representation of Space*, Yale University Press, New Haven-London 2018



1冊の本を起点に:第2部

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ、レトリック [1/3]

フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌pp.86-108

第1部[『CASABELLA』890号]では、『モンタージュと「メトロポリス』において著者のマルティーノ・スティエリが「モンタージュの実践を、近代空間を理解するための基本的な手段

に変えた展開』を説明するさまざまな方法を議論した。それを受けて、本書を2つに分ける「ミース・モンタージュ」の章に注意を向ける必要がある。そこには、これまで登場してきた多様なテーマ、形象、そして少なからずの人物が再登場する。これは本書で最も濃密で問題含みの章で、ミースが「フォトモンタージュとコラージュ」という、他の近代建築家には見られないほど彼が自らの目的のために用いた手段に、大々的に立脚した『視覚的レトリック』を実践するために用いた方法が検討に付される。この宣言をもってスティエリは、説得力ある仮説を提示し、詳細に論述した。本書評の第1部で示された情報をふまると、じつに刺激に満ちた議論だ。なぜならそこには、ミース作品の総体的な解釈、また特に、彼が活用した「議論の技術」すなわちレトリックに与えるべき意味の解釈が含まれるからである。

すでに、1910年のビンゲン・アム・ライン市ビスマルク記念碑案のプレゼンテーション・パネルに、ミースはかなり初步的なやり方でフォトモンタージュを使った。より洗練されより表現力のあるかたちで彼がこの手法を活用するのは、ベルリンの前衛運動の世界——スティエリは精緻に描写している——に熱心に出入りしていた時期だ。1920年代初頭にすでに30歳になっていたミースは、「まだ鉄道馬車で学校へ通ったことのある」「青空に浮かぶ雲のほかは何もかも変貌してしまった風景の中に立っていた」世代に属した。「技術の巨大な発展とともに、まったく新しい貧困が」彼の世代に襲いかかり、歴史は取り

返しがつかないほど貧困になった。「戦略上の経験は陣地戦によって、経済上の経験はインフレーションによって、体力上の経験は飢餓によって、道徳上の経験は権力者の実態によって、あのころほどみごとに化けの皮を剥がされたことがない」からだ。必読とも言えるヴァルターベンヤミンの「経験と貧困」にはこう書かれている[訳注1]。したがって、この「われわれの(非)貧困の時期に」、ダダとの出会いがミースにとって「ヨーロッパの美学的残骸の山の向こう側に視線を導く」上で決定的だったと、1932年および1923年に彼は書いている。1921年と1922年にベルリンにおけるガラスで覆われた2つの高層ビルのプロジェクトを説明するために彼が作ったパネルを見ると、彼がこだわりをもって眼差していた地平が何だったかが理解できる。これらのパネルに表されたフォトモンタージュは表現に富むものの、プレゼンテーションに彼が使ったスケッチほど綿密に検討されていない。これらはミースが異なる表現技術を同時に使ったことが、いかに特筆大書し議論に値するかを示す証だが、本稿では、特に適宜挿入した図版を通して示唆するにとどめたい[本誌:Figs.1-4]。

とは言え、これらのコラージュを見ると、使われた素材の正確な違いがその諸目的を伝達する明解さに驚かされる。なかでも異素材を、それらが混合しているからこそ、出版用印刷物にも宣伝目的にも効果的に活用できることに象徴される目的は、二義的なものではなかった。1921年のプロジェクトでは、分割された反射する[ガラスの]カーテン



Fig.1:ミース・ファン・デル・ローエ | フリー・ドリビューションラーメン
沿いの摩天楼計画案、ベルリン、1921 | スケッチ



Fig.2:同 | フォトモンタージュ



Fig.3:ミース・ファン・デル・ローエ |
ガラスの摩天楼計画案、1922 | スケッチ



Fig.4:同 | フォトモンタージュ

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan